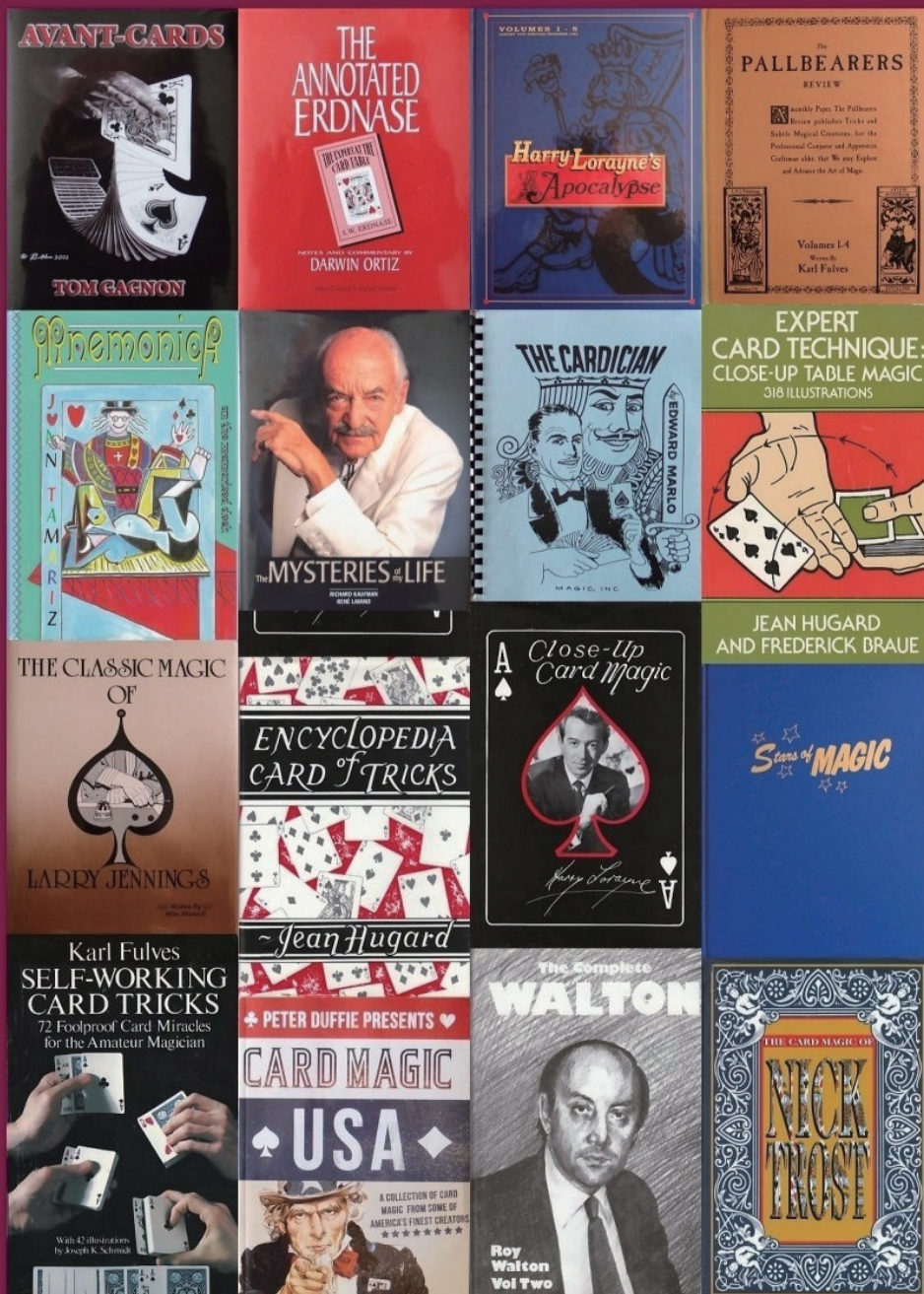


Card Magic Magazine



No. 19 November 1, 2013 by Hideo Kato

カードマジック徹底研究

スリーカードキャッチ

ラインハルト・ミュラーの'スリーカードキャッチ'の原案は、雑誌”ポールベアラーズレビュー”1971年7月号に登場いたしました。”Cardician's Journal Special”第5巻で概略を紹介いたしましたが、ここでは原著の説明に忠実に詳しく説明いたします。

スリーカードキャッチ

= ラインハルト・ミュラー、雑誌”ポールベアラーズレビュー”、1971年7月 =

* 方法 *

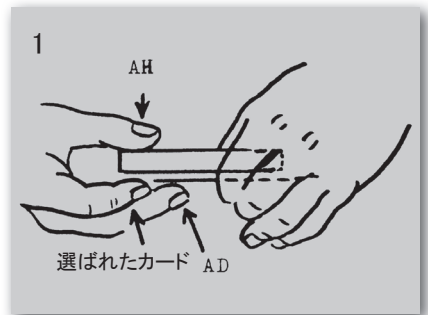
あらかじめ赤いAを2枚抜き出して、裏向きにテーブルに置いておきます。

相手に1枚のカードを抜いておぼえてもらい、デッキに返させて、ボトムにコントロールします。デッキを裏向きに左手にグライドの位置に持ちます。

テーブルから1枚のAを右手で取り、それを表向きにしてデッキのボトムに入れます。ボトムにそろように入れてください。

そして2枚目のAを右手が取りにいくとき、そのミスディレクションによって、左手はボトムのAをグライドします。そして右手で取ったAを表向きにして、デッキのトップにのせてそろえます。「2枚のAであなたのカードを見つけます」と言います。

右手でデッキの右エンドをつかみますが、中指の先をボトムのA、人さし指の先を選ばれたカード、そして親指をトップのAに当てます。図1。



左手をデッキからどけると同時に、急激に右手を右に動かすと、右手の指先が当たっている3枚が右手に残り、残りのデッキがテーブルに落ちます。

サンドイッチ状態の3枚を広げて見せてから、中央の裏向きのカードを抜いて、選ばれたカードであることを見せます。

スリーカードキャッチ・別バージョン

＝ラインハルト・ミュラー、雑誌”エピローグ”、1972年3月＝

前述の‘スリーカードキャッチ’の原案では、はさむ2枚のカードをトップとボトムに置いて行いますが、このバージョンは、見かけ上は2枚ともトップに置いてやるやり方です。

* 方法 *

2枚の赤いAを抜き出して、表向きにデッキのトップに置き、ATFUSを行います。つぎのようにやります。

表向きのAの下に密かに2枚のカードを取り、下の裏向きのカードの上に右親指でブレークを保ちます。上の表向きのAをデッキの上に取り、右手のカードをその上でそろえる動作をして、ブレーク下の裏向きの1枚をデッキの上に落とし、右手の2枚をテーブルに置きます。いかにも表向きの2枚のAをそろえてテーブルに置いたように見せるのです。

トップから2枚目の表向きのAを見せないようにデッキを広げて、相手に1枚抜かせます。相手がそれを見ておぼえたら右手に受け取りますが、左手はトップカードの下にブレークを作ります。そして右手のカードをティルトでトップから2枚目に入れます。そのあと、トップの3枚をダブルカットでボトムに運びます。

「この2枚のAで選ばれたカードを見つけます」と言って、テーブルから2枚を取ってデッキのトップに置き、デッキをグライドの位置に持ち直します。そのときグライドを行います。

このあとは原案と同じように行って、右手に3枚取り、はさまれているカードが選ばれたカードであることを見せます。

クイックアズアウィンク

＝ハーヴェイ・ローゼンタール、”セルフキングカードトリックス”、1976年＝

この作品については、“Cardician’s Journal Special”第5巻に、コントロール部分を省いて解説いたしましたが、コントロール部分を含んだ全体を再録いたします。

* 方法 *

2枚の黒いJをトップから2枚目と3枚目に表向きにセットしておきます。

デッキをテーブルに置き、相手にカットさせて、上半分を置いて、下半分を取らせ、よくシャフルさせます。1枚のカードを選んでおぼえ、もとの上半分の上ののせさせ、その上に残りのカードを重

ねさせます。

あらかじめ2枚の黒いAを表向きにしておいたと言って、カードをスプレッドして、2枚のAがトップにくるようにカットします。相手のカードはボトムから2枚目にきます。

2枚のJをテーブルに置き、上と下には相手のカードがないはずだと言って、トップカードとボトムカードを見せてから、まん中へんに入れます。

1枚のJをボトムに置き、もう1枚をトップに置きます。ボトムのJは図1のように半分左にずらしています。左中指の先は相手のカードに、左親指はトップのJに当たっています。



中指と親指でそれらのカードを押さえたまま、デッキを右に投げます。そうすると、左手には3枚のカードが残り、表向きのJの間に裏向きのカードがはさまっています。相手のカードを名乗らせてから、そのカードを表向きにします。

スリーカードキャッチ・コスキーバージョン

= ジェラルド・コスキー、雑誌“エピソード”、1973年3月 =

* 方法 *

最初に赤いAを2枚抜き出して、表向きにテーブルに置いておきます。

1枚のカードを選ばせて、トップにコントロールします。ダブルターンオーバーにより、いちばん上のカードが相手のカードでないことを確認します。裏向きに戻します。

デッキを相手に渡し、赤いAのうちどちらか1枚を表向きのままデッキのボトムに入れさせます。そのとき、あなたは密かに右親指の先につばをつけます。

デッキを受け取り、もう1枚のAを取ってくれと頼んだとき、親指のつばをトップカードの裏面中央につけます。受け取ったAをその上へのせ、押しつけます。

デッキを左手に持ちますが、指をまっすぐ伸ばした上へのせ、親指でデッキ中央を押さえます。そしてデッキを右方に飛ばしますが、トップとボトムカードは軽く押さえたままです。トップカード、ボトムカード、つばでくっついたトップから2枚目のカードが左手に残ります。3枚を広げて裏向きのカードがサンドイッチになっているのを見せます。相手のカードを名乗らせてから、それを表向きにし

て見せませす。

*** 備 考 ***

この方法を生かすには、相手にやらせることです。いきなりこの方法を相手にやらせてもうまくいかないですから、あらかじめデッキの飛ばし方を教えておいて、うまく飛ばせるようになったら、上記の通りに行います。

オルラムキャッチアカード

= エドワード・マルロー、雑誌“ジニー”、1987年11月 =

*** 現 象 ***

あらかじめ2枚のKを表向きにテーブルに置いておきます。デッキから1枚のカードを選ばせて、戻させてシャフルしたのち、デッキを左手に持ちます。右手で2枚の表向きのKを取って、勢いよくデッキのトップに投げつけ、間髪をおかずにデッキを右手に投げ捨てます。左手に3枚のカードが残り、広げると表向きのKの間に1枚の裏向きのカードがあります。それが相手のカードです。

*** 方 法 ***

2枚の赤いKを抜き出して、表向きにデッキのトップに置きますが、上から3枚目の下にブレイクを作ります。

ブレイク上の3枚をビドルポジションに持ち、デッキのトップカードの下にブレイクを作ります。表向きにKの上の1枚をデッキの上に取りるとき、ブレイクの下1枚を右手のカードの下にスチールします。スチールしたカードの上にブレイクを保持します。そしてカードをそろえ、ブレイクの下1枚のカードをデッキの上にドロップし、上の2枚を右手でテーブルに置きます。この操作はマルローの‘ATFUS MOVE’です。2枚をテーブルに置くとき、少しだけずらして置きます。

「ふつうはこのように広げてカードを選んでもらいますが」と言って、表向きのカードが見えないようにカードをテーブルにスプレッドします。そしてカードを閉じて裏向きに持ち、「きょうはこのようにカードを弾いていきますので、好きなところでストップをかけてください」と言って、右上コーナーをリフルして、ストップしたところのカードをピックさせます。相手が見たカードの上にブレイクを作って、カードを閉じます。

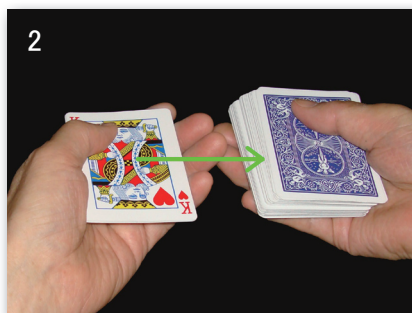
トップカードの下に右親指でブレイクを作り、左小指のブレイクからカットして、下半分を上まわします。そして左小指で表向きのKの上にブレイクを作り直します。そしてブレイクからスリップカットを行い、左手のカードを右手のカードの上ののせます。これで表向きのKはトップから2枚目に来て、相手のカードがトップにきます。トップの2枚をダブルカットによってボトムに移しますが、その2枚の上にブレイクを保持します。

いままでカットが何回も行われたので、「あなたのカードは上にはありません」と言って、トップの数枚を広げて、ちらっと表を見せ、もとに戻します。

左手を正面にかまえ、右手でテーブルに置いてある2枚(2枚の表向きのKと思われる)を取り上げ、図1のように手前から勢いよくデッキのトップに投げ、



続けて左手でデッキを右方に投げて右手で受け止めますが、図2、左親指をトップカードにあて、トップカードとボトムブレーク下の2枚、合計3枚を左手に残します。



左手に残った3枚を広げ、表向きのKの間に裏向きのカードが1枚はさまっているのを示します。相手のカードを名乗らせてから、そのカードを表向きにします。

* 備 考 *

デッキを投げてサンドイッチを作る手法が、1962年ごろのマルローの考案になるもので、それ以外の手順構成がラッカバマーによるものだとのことです。

キャッチングシレクテッドカード

= 作者不詳、雑誌「スタニオンズマジック」、1912年10月 =

ここで歴史をさかのぼって、デッキのトップカードとボトムカードをとる手法が古くからあったことを確認しておきましょう。

* 方 法 *

2人の客が選んだカードをデッキのトップとボトムにコントロールします。親指と他の指でデッキをつかみ、強く押さえたままデッキを空中に投げ上げます。トップカードとボトムカードが手に残ります。手を落ちてくるカードにぶつけて、いかにもそこでつかみ取ったようにして、2枚のカードを指先に現します。

フォーカードキャッチ

= ハリー・ローレイン、“クワンタムリープ”、1979年 =

* 方法 *

ボトムに4枚のAを置いた状態からスタートします。ボトムから、黒、赤、赤、黒の順とします。

カードを広げて、相手に1枚のカードを選ばせます。もちろんAを抜かせてはいけません。カードを広げたときに、ボトムの方も広げるようにして、閉じるときにボトムから4枚目の上にブレイクを作ります。

ブレイクを右親指手で継承し、デッキを右手にヒンズーシャフルのポジションに持ちます。ヒンズーシャフルをスタートし、半分ぐらいのところで左手を相手の方に伸ばし、左手のカードの上に相手のカードを返してもらいます。シャフルを続けますが、相手のカードを右手のカードの下にスチールし、最後にブレイクから下のカードをトップに置きます。相手のカードをスチールするとき、相手のカード1枚だけでなく、数枚をスチールしてかまいません。

「あなたのカードを見つけます」と言って、トップ2枚の下にブレイクを作り、ブレイクからダブルアンダーカットを行います。現在のカードの状態は、トップとボトムに2枚ずつAがあり、トップから3枚目に相手のカードがあります。

トップカードを表向きにします。「これはあなたのカードですか」とたずね、「でもAが出てきました」と言いながら、トップの2枚の下にブレイクを作ってそろえ、2枚を右に2cmぐらいずらします。

「もしかすると下にあるかもしれません」と言って、ボトムカードを引き出して表向きにして、「またAが出てきました」と言って、そのAを表向きのまま左に2cmほどずらしてボトムに置きます。

そして左手を伸ばして、中指の先をボトムから2枚目のカードに当て、親指を右にずれているトップカードに当てますが、親指の腹はトップから2枚目に当てます。図1。



スリーカードキャッチと同じ要領で、デッキを右方に飛ばし、右手でキャッチします。左手に5枚のカードが残りますが、上から2枚目のカードは1枚目の下にそろって隠れています。そのカードがずれている場合もありますが、5枚のカードをそろえてしまいます。ずれなかった場合には、中央にはさまれた2枚の裏向きのカードをよく示して、「Aの間に2枚のカードが出現しました」と言います。

5枚をそろえ、右手のデッキをテーブルに置きます。トップカードを右手に取り、そのカードで2枚目のカードを表向きに返します。いったん5枚をそろえ、左手の指先でボトムカードを引き出し、さらにボトムから2枚目の裏向きのカードも引き出して、右手のカードでそのカードを表向きに返します。4枚のAがそろいました。

カードを閉じ、アスカニオスプレッドのできる人は、ここでアスカニオスプレッドを行って、もういちど4枚のAを見せます。ローレンはダブルバックルで代用してもよいと述べていますが、どちらも行わないという選択肢もあります。

魔法をかけてからカードを広げ、中央に裏向きのカードが現れたのを見せ、相手のカードを名乗らせてから、そのカードを表向きにします。

技法 ブレークの継承

= 加藤英夫、2002年3月4日 =

前述の'フォーカードキャッチ'では、相手にカードを抜かせたあと、カードを閉じるときに左小指でボトムの4枚の上にブレークを作ります。そのブレークをヒンズーシャフルのポジションにおける右親指のブレークに継承しろと書かれていますが、これはかなり難しいですし、けっこうもたつきます。それをスムーズに行う方法を考えました。

* 方法 *

カードをそろえるとき、ボトムの4枚を下に7, 8mm程度ダウンジョグし、右手でデッキをヒンズーシャフルのポジションにつかみにいくとき、図1のように突き出ている部分を右親指で下に押し、



そのあと左人さし指でデッキの前エンドを手前に押し、図2のように右親指でブレークを保持することができます。



ツーステップキャッチ

= 加藤英夫、2001年7月25日 =

* 現象 *

相手が選んだカードがデッキの中に入れられて、デッキがシャフルされます。マジシャンが1枚ずつディールしていき、相手がストップをかけたところで手を止め、ストップがかかったところのカードを表向きにして、テーブルのパイルのトップに置き、残りのカードをそれらの上に重ねます。もういちどディールしてストップがかかったところで止め、同じようにカードを表向きにして置き、残りのカードをそれらの上に重ねます。

マジシャンはデッキをビドルポジションに持ち、トップカードとボトムカードを同時に取り、テーブルにディールしていきます。あるところで、デッキのトップに先ほど表向きにしたうちの1枚が現れます。そのときのボトムカードを引き出すと、それも表向きのカードです。そしてその2枚を引き抜くと、裏向きのカードが1枚はさまっています。それが相手のカードなのです。

* 方法 *

あらかじめ2枚の黒いJを抜き出して、表向きにテーブルに置いておきます。

相手に1枚のカードを選ばせ、ボトムにコントロールします。それをボトムに保ってカードをシャフルします。

カードをディールしていき、「このようにカードを置いていきますから、好きなところでストップをかけてください」と言います。密かにカードをカウントします。ストップがかかったら手を止めます。ディールした枚数が奇数の場合は、最後にディールされたカードを表向きに返して、テーブルのパイルのトップに置きます。ディールした枚数が偶数の場合は、手元のカードを表向きにして、テーブルのパイルのトップに置きます。いずれにしても、テーブルのパイルには、表向きのカードの下に偶数枚ある必要があるのです。その枚数をX枚だとします。

残りのカードをテーブルのパイルに重ねて取り上げ、いったんカードを広げ、「あなたのストップのかけ方によって、表向きのカードの位置はまったくランダムに決まります」と言いながら、表向きのカードの下X枚の半分の枚数の下にブレークを作ります。

カードをディールして、相手にストップをかけさせます。先ほどと同じやり方で表向きのカードをディールしたカードのトップに置き、残りのカードを右手でテーブルのパイルに重ねますが、ブレークを右手の親指で継承します。カードを取り上げて、ブレークからパスもしくはダブルカットします。

ポジションチェック：トップとボトムの同枚数目に表向きのカードがあり、下の表向きのカードの上に相手のカードがあります。

トップとボトムをミルクビドルのやり方で取っていき、テーブルに置いていきます。表向きのカードが出てきたら、ボトムカードも引き出して、「不思議なことにいちばん下にも表向きのカードがあります」と言って、同時に出てきた不思議さを表現します。

そしてボトムカードを引き出した状態から、「そして2枚を引き抜くと、」と言って、3カードキャッチの要領で相手のカードをサンドイッチして3枚を左手に取ります。相手のカードを名乗らせて、はさまったカードを表向きにします。

ドロップキャッチ

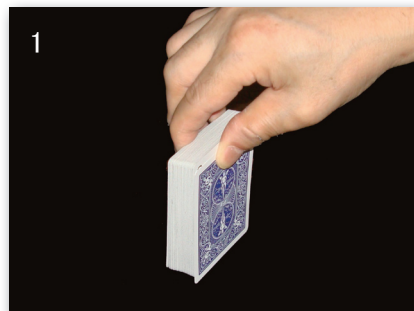
= 加藤英夫, 1999年4月29日 =

* 方法 *

あらかじめ2枚の黒いJを、表向きにテーブルに出しておきます。

相手に1枚のカードを選ばせ、ボトムにコントロールします。デッキのバックを相手に向くように垂直に持ち、1枚のJを取り、表を観客の方に向け、デッキの客側に入れ、デッキとそろえます。2枚目のJを取り、表を観客の方に向け、デッキの手前側に入れ、デッキとそろえますが、デッキより約2mm下にジョグさせます。

デッキの上端を右手の親指と人さし指ではさみますが、図1のように他の指は曲げて、カードの持ち方が怪しく見えないようにします。親指と人さし指は、強くカードを押さえます。この図では、カードのずらし方が誇張されています。



「3、2、1、0」とカウントし、「0」のときに親指と人さし指を一瞬少し開き、そしてすぐに閉じます。2枚のカードと相手のカードが親指にくっつくために、それら以外のカードが落下し、それら3枚が親指と人さし指の間に残ります。

3枚の下を左手で持ち、右手で3枚をファン状に広げます。表向きのJの間に1枚の裏向きのカードが現れます。相手のカードを名乗らせてから、中央のカードの表を見せます。

不純物除去

= 加藤英夫、1999年4月29日 =

いままでと異なる現象ですが、ドロップキャッチの原理を使用しているので収録いたしました。

* 方法 *

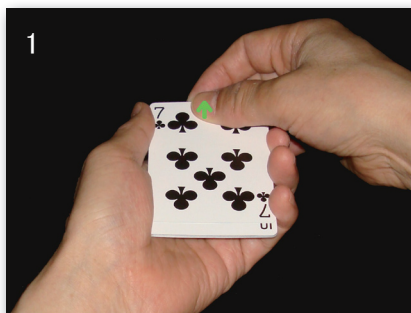
「ある物質の中に不純物が混ざっているときの、マジック的不純物取り除き法をお見せします」と言って、デッキから4枚の黒いカードと、3枚の赤いカードを抜き出します。デッキは使いません。黒いカードを表向きに広げ、「黒い物質の中に赤い不純物が入っているとします」と言って、赤いカードを表向きに黒いカードの中に1枚おきに入れます。

カードを閉じ、表向きに右手のビドルポジションに持ちます。1枚目の黒いカードを左手に引いて取り、2枚目の赤いカードをその上に引いて取ったら、そのカードの下にブレイクを作ります。3枚目の黒いカードを取るとき、ブレイクの上の赤いカードを右手のカードの下にスチールします。スチールしたカードの上に右親指でブレイクを作ります。

4枚目の赤いカードを取るとき、親指でブレイクしている赤いカードをいっしょに左手のカードの上に取ります。5枚目の黒いカードを取ったら、その下にブレイクを作り、6枚目を取るときに右手のカードの下にスチールします。7枚目は下にもう1枚の黒を重ねたまま左手のカードの上に取ります。

以上のカウントによって、上から、黒、黒、赤、赤、赤、黒、黒となっています。

「このように不純物がよく混ざっています」と言いながら、左手を少し手前に傾けて、図1のように右手の親指と人さし指をカードの前エンドにかけて、フェースカードを3mmぐらい引き上げます。図1とこのあとの図2と図3のずらし方は誇張されています。



カードをずらしたまま、そのエンドをつかみ、カードを手前に倒して裏側をこちらに向け、その動作のつながりで、いちばん上のカードを手前に3mmぐらい引きます。図2。これで、パケットのトップとボトムカードが他のカードと3mmぐらいずれた状態になりました。

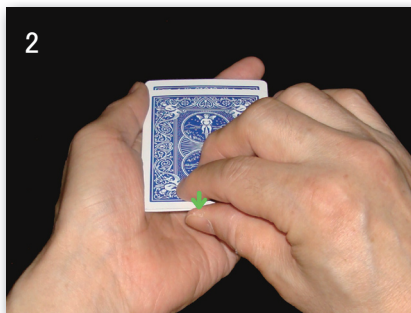


図3のように、カードの上エンドを、親指と人さし指の先で強くはさみます。「3、2、1、0」とカウントして、「0」で親指と人さし指をゆるめ、すぐに閉じます。黒い3枚がテーブルに落ちます。



手に残っているカードを広げて、4枚の黒であることを見せてから、テーブルに落ちた3枚を表向きに広げて、3枚の赤であることを見せます。「うまく不純物を取り除くことができました」と言って終わります。

フォーエースキャッチ

= 加藤英夫、2000年1月31日 =

‘ドロップキャッチ’では、表面のカードをずらして保持することによって、その下のカードも残るとい原理が使われています。その原理を横方向に応用して、4枚のカードをキャッチするマジックです。

* 方法 *

4枚のAをデッキにばらばらに入れ、マルチプルシフトなどによってトップもしくはボトムにコントロールし、それからトップに2枚、ボトムに2枚になるようにカットします。

デッキを両手に持ち、左親指でトップカードを図1のように下だけを右にジョグしますが、縁の線が見えない程度のずらし方です。この図では左手が省かれています。図1と図2では、ずらし方が誇張されています。



左中指と薬指を使って、ボトムカードを同じようにサイドジョグします。そしてデッキの左下コーナー近くを左手で図2のように保ちます。親指の先をトップカードと2枚目、中指の先をボトムカードと2枚目のカードに当てます。



親指と中指を強く押し当てたまま、勢いよくデッキを右方に投げ、右手で受け取ります。左手に4枚のAが残りますから、それらを広げて表を見せます。

マルチプルキャッチ

= 加藤英夫、2013年1月7日 =

ハリー・ローレインの'フォーカードキャッチ'で多数枚をはさむやり方が、あまり確実性がないので、確実に複数枚を取れる方法を探求して、このやり方に到達いたしました。

* 方法 *

「あとでこの2枚のJを使います」と言って、2枚の黒いJを抜いて、表向きにテーブルに置きます。

4人の客に1枚ずつ抜かせ、おぼえてもらいます。1人目のカードを受け取り、デッキの上の方に入れてアップジョグさせます。あと3人から1枚ずつ受け取り、1人目のカードと少しずつ離して分散させてデッキの中に入れて、すべてアップジョグさせます。

マルチプルシフトもしくはダイアゴナルパームシフトによって、押し込んだ4枚のカードをボトムにコントロールします。そのあとボトムの4枚を保つシャフルを行ってもかまいません。

2枚のJを取り、「この2枚のJで選ばれたカードを見つけます」と言って、表向きにデッキのトップに置き、中央からカットします。

デッキを両手の間に広げて、中央の2枚の表向きのJを見せ、「まだ2枚の間には何もはさまれていません」と言って、カードを閉じますが、2枚のJの間にブレイクを保持します。

「魔法をかけると、Jの間に皆さんが選んだカードがはさまります」と言って、両手をかまえてリフルパスを行います。

トップの表向きのJを指さして、「いちばん上にJがあります」と言って、カードを両手の間に広げて、ボトムのJを見せ、「そしていちばん下にもJがあります。ですから皆さんのカードは見事Jの間にはさまれました」と言います。「もちろんこれは冗談です。いまから余分なカードを取り除きます」と言って、カードを閉じますが、ボトムから5枚目の上にブレイクを作ります。

左親指をトップカードの裏面に当ててデッキを右方に投げますが、左手小指を下げてブレイクより上のカードに触らないようにします。そうすると、ボトムの5枚とトップ1枚が左手に残ります。

6枚を広げて、2枚のJの間に6枚の裏向きのカードがあることを見せます。そして4枚のAを抜いて見せていきます。

* 備 考 *

このトリックにおいては、違った演じ方の選択肢があります。まず、キャッチするときのデッキの扱い方です。投げてテーブルに落とすやり方もありますし、デッキを右手で受け止めるやり方もあります。投げるのではなく、右手でデッキを右方に引き抜く、という演じ方もあります。

2つ目の選択肢は、バラバラに入れたと見せて1カ所にまとめる技法についてです。マルチプルシフトかダイアゴナルパームシフトを使って、と説明いたしましたが、ブラウエアドオンを使って、Aをバラバラにデッキの中に入れてように見せて行う方法もあります。大勢に対して演じる場合は、バラバラに入れたことが全部の客によく伝わるので、ブラウエアドオンを使う方がよいと思います。

そしてもっとも重要な選択肢です。それは4人の客が選んだカードを当てる、ということをし替えるということです。そもそも見せる相手が4人以上いなければどうにもなりません。また4人にカードをおぼえさせるとしたら、そのうちの1人ぐらいは忘れる可能性も高くなります。そこで違う演出を採用するのです。つぎのようにやります。

最初に2枚の黒いJを抜き出して、2人の警官だと言います。そして4人組の強盗団として、相手にJ以外の数を指定させます。デッキを表向きに広げて、指定された数の4枚をアップジョグします。デッキを裏向きにして、アップジョグされた4枚を抜いて表向きにトップに置き、ブラウエアドオンを行います。

トップの4枚をデッキの中にバラバラに入れてアップジョグさせますが、1枚目はトップから7枚目に入れます。あとの3枚は順次少し離して下に入れてアップジョグ状態とします。デッキを広げてバラバラに入ったことを強調します。カードを閉じるときに、トップの4枚の下にブレイクを作ります。そしてブレイクを利用してダブルカットを行います。4枚のカードはボトムに運ばれます。

2枚の黒いJをトップに置いて中央でカットします。そしていったん広げてJの間に何もなかったことを確認します。Jが強盗団を挟み撃ちにするというような話をしてリフルパスして、広げて全部のカードがはさまれたという冗談を見せます。そのあとJの間に4枚をはさんで、強盗団が捕まったことを見せます。

以上の演出はこの備考を書きながら思いついたことです。演出が面白ければ、“方法が面白い必要はない”というのが私の信念です。もちろん、不思議さが損なわれてはならないという条件付きのことではありますが、ですからストリッパーデッキを使うことをすぐ思いつきます。

ストリッパーデッキなら、4枚をはさむのにいくつかの違ったやり方ができます。ストリップして抜き出すやり方、手に持ったデッキからバラバラと落として減らすやり方。ヒンズーシャフルして6枚を1カ所に集めてからリボンスプレッドして見せるやり方などです。

サイドスローキャッチ

＝ダーウィン・オルティズ、“スキヤムズ&ファンタジーズ”、2002年＝

’スリーカードキャッチ’は、ラインハルト・ミュラーの原案である、グライドポジションからのスローから始まって、ハーヴェイ・ローゼンタールの横方向へのスローが発表されて、人気が高まったと言えるでしょう。しかしローゼンタールのデッキの飛ばし方にも、私には気に入らない点がありました。もういちど3ページの図1を再録しておきます。

私はこの図1のように、トップカードはデッキにそろえ、ボトムカードだけ左にずらして持つよりも、



図2のようにトップカードも右にずらして、デッキを表向きのカードではさんだことをはっきりさせてやった方がよいと思ったのです。ところが図2のような持ち方をすると、左親指がいちばん上の裏向きのカードの上を横切っているので、投げたときにそのカードが残ったと感ぜられる可能性があるのです。



他に効果的な投げ方をないかと探しまわると、ありましたありました。ダーウィン・オルティズが、“スキヤムズ&ファンタジーズ”で解説している、’ラストラフ’という作品の中で、いまままで解説したのと違う飛ばし方を使っているを見つけました。作品全体ではなく、その手法のみを解説いたします。サイドスローキャッチという名称は、私が命名しました。

* 方法 *

オルティズは、図3のようにトップカードを手前に、ボトムカードを前方にずらした状態で、カードを右方に飛ばしています。左小指でしっかりボトムから2枚目を押さえていないと、うまく左手に残りません。



このやり方だと、明確にデッキがなくなった位置に1枚が残るので、現象がクリアに見えます。

加藤英夫のホームページ

<http://www.magicplaza.gn.to/>

Card Magic Magazine 第 19 号

発 行 2013 年 11 月 1 日

著 者 加藤英夫

発行者 加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp

